

ふるさとの かたりべ

第 11 集



発行 嘉瀬ふるさとを探る会

38
K
1

ふるさとの

かたりべ

巻頭言

発刊に寄せて



金木町教育委員会

教育長 成田 勝義

「嘉瀬ふるさとを探る会」の皆さんの、ふるさとに寄せる熱い思いを満載して、ここに第十一集が発刊されましたことを心からお喜び申し上げます。

歴史は人のつながりと時代の潮流によって形成され、生命が保たれているものであり、私たちは過去を知ることにより、現在に生きる意義を認識して後世に遺産を継承していく責務があると思います。「かたりべ」は、それを気張らない平易な文章で、温かく語りかけてくれる貴重な史書であり分献であります。

今、学校教育の中でも郷土学習の必要性が叫ばれ、郷土の自然環境、歴史、文化等を教材として取り上げる教育の推進に努めることになっております。金木町では、これを教育の柱の一本に位置づけ、自分の生ま

れ育ったふるさとを知ることにより、ふるさとに愛着と誇りを持ち、住みよいふるさとづくりに貢献できる人づくりをめざしております。町内の小学校が、この四月から使用している社会科の副読本「わたしたちの金木町」も、そのために編集されたものであります。

このような意味からも「かたりべ」の発刊はまことに時宣にかなったものであり、小中学校の地域教材として、今後大きな役割を果たしてくれるものと確信しております。

わがふるさとが、かけがえのないまほろばであることに誇りを持ち、壮大なロマンを求めて、ふるさとの掘り起こしに努力されている会員諸氏の情熱と行動力に衷心より敬意と感謝を申し上げ、発刊に寄せる辞といたします。

目次

〈表紙〉……………かたりべ1～10
 解説……………山中正津

《巻頭言》発刊に寄せて……………成田勝義

古い農機具……………沢田政孝 1

昔の民間療法……………秋元惣之進 9

セレモニーは変わる―昔の葬式―……………山中正津 12

火の玉体験記……………山中長三郎 20

村の怪奇談……………秋元惣之進 22

特集50年前その時私は

「私の五〇年前」生地獄の中で……………木村治利 27

疎開中の太宰治と冬の花火……………沢田薫 39

友の戦死……………山中長三郎 41

軍隊に志願した動機……………秋元惣之進 43

五十年前 その時私は……………山中正津 49

続・きぬたの小径……………沢田一步 67

川柳にとりつかれて……………櫛引八千代 73

自称山猿遭難顛末記……………須崎正敏 75

鳴海家の由来……………鳴海勲 79

童謡 凧……………日暮遊子 38

津軽弁、嘉瀬の小話集……………木村治利

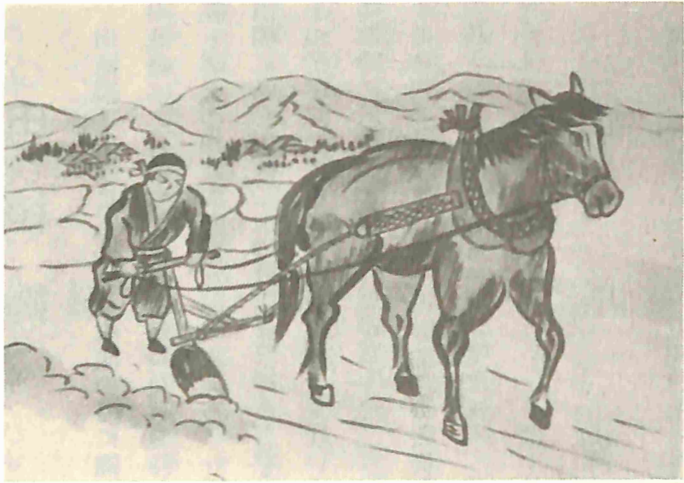
(1) 飲ムナ? (2) 吐くと掃く……………21

(3) ヌダバレとクタバレ……………26

(4) アメとアメル (5) 親子と夫婦……………42

(6) イパダダ標準語……………48

(7) ムンツケラはない (8) ウチワとウツワ……………74



古い農機具

沢田政孝

○ 犁

|| 昭和中期まで使用 ||

水田や畑の耕起に使用された犁は、単用と双用とがある。田圃を耕起するに、馬に犁を付けて引ばらせて田を起したものである。朝早く起きて、馬の飼料の干草を切り、それに糠を少々かきまぜて馬の一日分の飼料を吠に入れて犁と共に荷鞍に付けて田圃に出かける。一日中で耕起は三反歩(約三〇アール)ほどである。初めは一番打、それから二番打もある。二番打は一番打った後、土を廻転させるだけが二番打である。二番打は一日に四反歩位出来た。

○ 馬 鋤

|| 昭和中期まで使用 ||

水田の耕起後に田圃に水を入れてかきまわすのが馬鋤である。水の中で土を攪拌されると土が、砕ける。一枚の田を三回攪拌する。一回目は荒代掻きで、二回目は中代掻、三回目は代掻とある。馬の先に棒を付けて一人が馬を歩かせる。馬を歩かせる人を「さひとり」と言う。「さひとり」は小学校五六年生からとらされた子もある。

○ 柄 振 り

|| 昭和中期まで使用 ||

えびりとも云う。田圃を犁で耕して、田に水を入れ、馬鋤で土を攪拌し、泥どろにした土を平らにして苗を植えるようにする。長さ五尺ばかりの丸い棒に横に板を付けたものである。

○回転式田植型

|| 昭和中期まで使用 ||

苗の植付けの位置を示すため、回転しながら、田面に印を付けるのである。回転式田植型は田植縄後に付いた機械である。鉄の回転型機もある。当時の田圃一反分が 大きくて三枚、小さいと四枚である。機械を廻すのに大変であった。先づ 田に一本の縄を張ってそれに機械の型を上げて、縄と型と一定になってから廻すことになる。一定にならないで廻すと大変になる。一枚の田圃を数回も移動すると型が曲がってくる、植苗も曲る。

回転式田植型は、田面の泥の上に正方形の型が付くのである。

○田植縄

|| 昭和中期まで使用 ||

田植縄は田面に張って、田植の時に縄に沿って植付けて行くのです。田植縄は二人で張る。一本づつ尺示を持って縄を真っすぐに張る。縄と縄の中に田植乙女が二人入る。一人四株植えるから八株になる。田面に縄を田植乙女の数により何本も張る。田植終ると、また移動する。その時、縄の泥を良く落してからでないといけない。でないと、縄の移動の時に田植乙女の背に泥が落ちる。泥を落してよく叱られた事もある。その時代の田植は一人一反分植えると終りであった。田植えの植付けする株と株との間は大体六寸四方であり、一坪(六十四株)というのが、古くから目安である。

○雁爪

|| 江戸より昭和中期まで使用 ||

蟹爪とも熊手とも呼ぶ。又田打ちとも呼び、水田の一番、二番の除草

○稲鎌

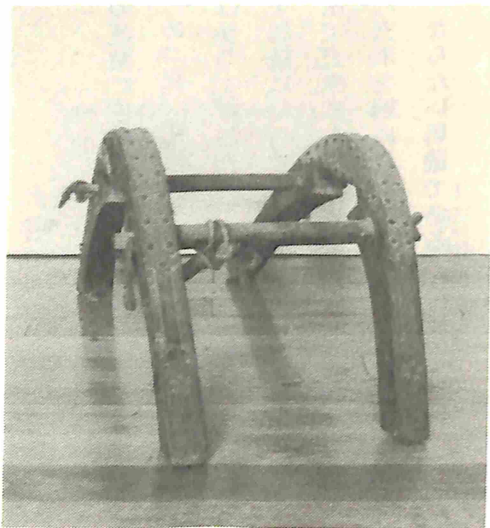
|| 現在でも使用 ||

古くから稲麦等を刈取に使用された(刀鎌と鋸鎌とある)。特に稲刈に使用した。当時稲刈時期には寅太郎があつて午前五時合図の太鼓が打ち鳴らされそれからでないと稲刈に出で行くことが出来ない。それから先に砥石で鎌を砥ぐ、良く切れるように砥ぐ、それから稲刈を始める。鋸鎌は木を切る鋸のような鎌である。鋸鎌は砥ぐこともない。刈った稲は、七株か八株を一把にしてたばねる。午後から島立にして立てる。島立は十二把を束ねる、穂部を上にして根元を拡げて畦に立てる。十分乾燥させてから稲を集めて稲乳にして積んで置く。津軽の風土は春遅く秋は早い、秋の彼岸前後を稲刈取りの適期と昔からされてきたのである。

○荷鞍

|| 昭和中期まで使用 ||

馬の背に荷鞍を置き荷物等を運んだものである。農耕馬は荷物運搬が主役である。当時は農道も整備されないので、田圃より稲上げするには駄付馬がよく利用された。馬の背に鞍を置き片側に七丸つっぽうでくりつけるので一四丸付く。力の強い馬には更に背中に一丸乗せて十五丸を運搬する。



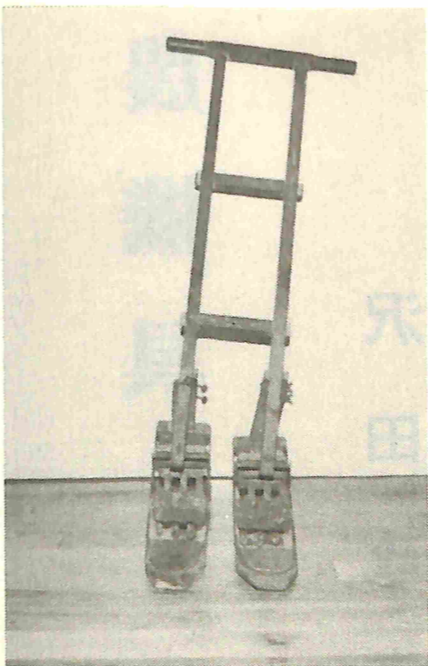
に使用したものである。熊手は見たことがあるが、水田の除草に使用した事を見た事がない。恐らく田圃に雑草が生えたと雁爪を土に刺して、草をひっくり返したのではないかと思う。江戸時代が除草に苦勞したのであろう。

○回転中耕除草機

|| 昭和中期より現在も使用 ||

二連の転廻車であり、最前端に滑走板が着いている。水田の中耕除草に使用する。大正時代は二連で株間が一株より除草出来ないが、現在では四連の転廻車で、押して行くと稲の株間二株除草される。除草機が無い時代は手取である。朝から夕方迄腰を曲げて手の除草、田の草取は三回か四回除草する。一月以上も除草したので、指が痛くなり、指にゴムサック、又は金爪をはめて除草した。

一人で一日に一反歩除草するのが標準で、田の除草は田植後二十日位油断すると一面に草が生えてきて、手取りが困難になり、稲作そのものを放棄せねばならぬことさえある。特に高温の年は草の育ちが格別さ



かななものがある。草の生長がはじまるのが見えたら賃金や飯米入費をかえりみず、日雇いを頼んでも除草したのである。

○足踏脱穀機

|| 昭和中期まで使用 ||

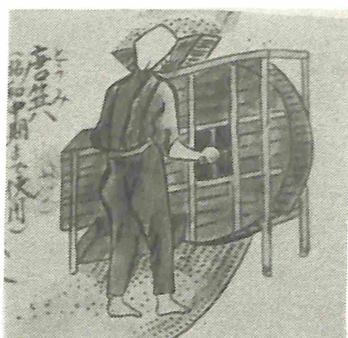
明治時代は千扱き(千歯扱き)であった。それからラセン式であったがその後逆Y型足踏脱穀機が完成した。足で踏んで稲から籾を落す機械である。脱穀機の上を網で覆い、籾を外に出さない様にしており、当時一町分位の稲は四、五日位かかったもの、朝三時に起きて足で踏む汗を流し流して右足が疲れると左足で三時間位踏むと全身か汗にまみれて踏む。その後 脱穀機にブリーリを付けた単相で脱穀機廻して稲扱をした。どんなに楽になったか。



○唐箕

|| 昭和中期まで使用 ||

中国から元禄年間に伝来した。手廻しによって穀類の選別をしたものである。唐箕を一番多く使用した穀類は籾である、脱穀機で落した籾を唐箕に入れて、手で廻すと重い籾と軽い籾とゴミを選別する。全部木で造られて羽根は八枚付いている。手で廻すと風が出る、早く廻すと風が強く出る、遅く廻すと弱くなるのでよく叱られた。一定に廻さないと良い籾が出来ない。大豆又は小豆等も選別する。



○馬 橋

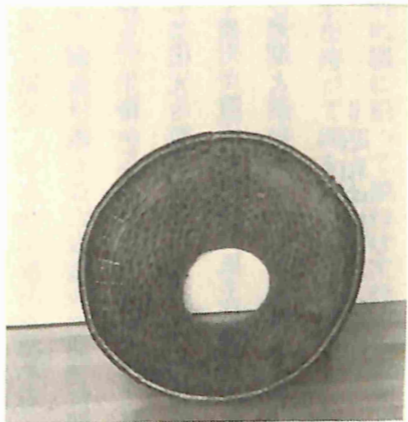
|| 昭和中期まで使用 ||

冬は雪の上を馬橋で荷物の運搬に使用、夏は荷車である。戦前戦後、農村の輸送は農耕馬が主役であった。橋は木で特に栗、カシの木である。木の長さ六尺五寸、幅五寸ばかり、厚さ四寸で、その橋二枚、幅二尺八寸に固定してある。雪の上を馬橋には特に米俵を十俵か十五俵位付けて精米所に運搬したり、精米所で玄米にして家に運搬、又は年貢米を納めたりした。年貢米とは地主に玄米を納めたものである。冬には山で薪を運んだり、冬は農家になくてならない馬橋である。

○じょうご

|| 昭和中期まで使用 ||

割竹で編んだ、朝顔の型の道具で、穀類を俵や吠などに入れる時に、先づ、じょうごを入れてから穀類を俵・吠・袋等に入れる。現在では種扱の時に使用しているのが見られる。



○箕

|| 昭和から現在でも使用 ||

古くから使用されている。風を利用して、箕に穀類を入れて、箕を上し穀類は箕に落として、ゴミやら藁を飛ばす。箕で選別に使用したり、穀類を俵・吠等に入れる時に一番使用した。



▷ 箕



▷ 万石

○万石

|| 昭和初期まで使用 ||

扱摺機でかけた玄米を万石で、良い米と、悪い米とを選別する。大正から昭和初期迄は扱摺機で玄米にした。玄米と扱殻がでる、それを唐箕に入れて、扱殻を飛ばすと玄米だけ残る。その玄米を万石にかける。良い玄米と、悪い玄米とが出る。悪い玄米とは青米のことである。良い玄米は俵・吠に入れて検査を受けて売りわたす。

○俵編器

|| 昭和中期まで使用 ||

俵編棒に七寸位の間隔で棒に、みぞを掘り、それに孤槌に細い縄を巻き付けて藁で編んで行く。朝早くから藁を綺麗にして、十九位、俵編は冬の仕事であって、若者達は四、五人集って競

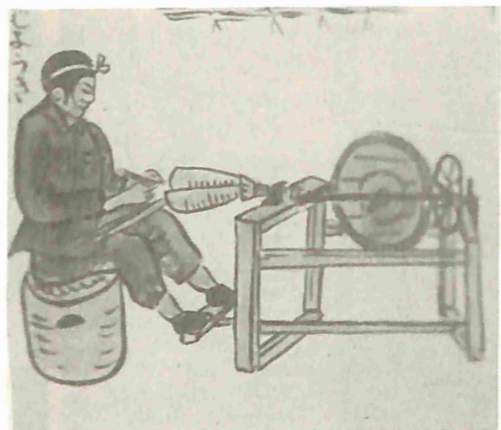


うようにして俵編みをした。一日中に十枚位編んだもので、俵の高さは二尺八寸位である。俵は米を入れるに編んだもの。

○製縄機

|| 昭和中期まで使用 ||

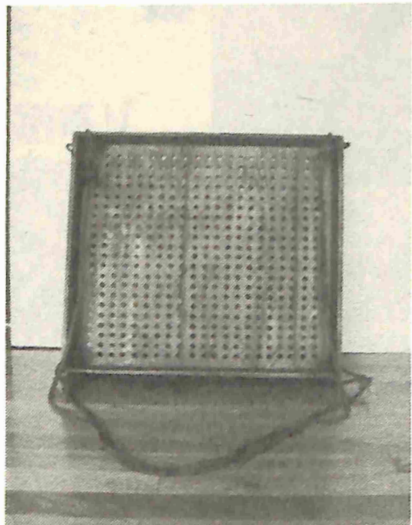
縄は主に包装用として使用したもの。製縄機の無い時は両手で縄をなつたものである。藁を良く綺麗にして、藁打臼と藁打槌で柔く打って製縄機の鉄板の(じよごに藁を入れて足で踏むと縄が出来あがる。縄一玉に藁六七十把位。だから一日中に二玉位より出来ない。当村では製縄工場が盛んで五工場もあった。



○ともし

|| 昭和中期まで使用 ||

扱おとしとも呼ぶ。足踏脱穀機で稲をこくと扱と藁とが落ちる。落ちた扱と藁を箕に入れて、ともしに入れて動かすと、扱が下に落ち藁が残る。扱と藁とゴミを選別する。扱おしは木で四角で数個



の穴を開けたものの写真を見て下さい。

○水車

|| 大正から昭和中期まで使用 ||

水車は足で踏んで田圃に水を入れるに使用した、水車は溝(堰)に水が入っておるので水車を棒でしっかり固定してから水車の上に昇り跳で踏んで田圃に水を入れる。田圃一反分当り五六時間位かかり水を入れたものである。一日に二反分、二枚である。特に荒掻の時に水が一番多く必要である。それから中掻代掻作業で必ず水が必用で、その後も八月下旬頃まで年に数回水を入れるに水車を踏んだものです。当時は数十台も見られた。



○トサネコ

|| 明治より昭和中期まで使用 ||

トサネコと言うのはアイヌ語か方言語か解らない。十三湖から取られた、海藻類である。長さが七尺位幅は五尺位である。トサネコの良い事は軽くて焼けることがなく、それに暖かいのがよい。明治、大正時代には多く使用したものである。冬には山に薪切に行く時は必ずトサネコが必要である。それは山に小屋を建てて、薪切終る迄十五日間位山宿り、山小屋での生活であったから焚火を焚くと焚火がよく飛び跳ねる。飛び